



三人の女

室生犀星

三人の女

昭和三十一年九月二十六日印刷
昭和三十一年九月三十日發行

定價 貳百八拾圓
地方賣價 貳百九拾圓

著者 室生犀星

發行者 佐藤亮一

發行所 株式會社新潮社

東京都新宿區矢來町七一
電話東京(34)代表七一—一八
振替東京八〇八番

亂丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替へいたします。

印刷・塚田印刷株式會社

製本・神田加藤製本所

Printed in Japan

目次

一	白	魚	七	
二	剃	刀	三三	
三	君はいましあはせか		六六	
四	埴	輪	色	三三
五	手	巾		六六
六	何もない世界から何かを			八四
七	交換	條件		一〇〇
八	第三	の女		一二六

九　ぶ　ろ　ー　ち

一三

十　恥かしいひとびと

一四

十一　鳥　　と　　菊

一五

十二　女はみな誰かを待つてゐる

一六

十三　鐵　　の　　棒

一七

十四　裸　　體

一八

十五　父　　と　　子

一九

裝
幀

松
林
桂
月

三
人
の
女

一 白 魚

時計はじりじりとじりついて、やつと三時十分前に廻つた。江梨子の顔の中のものゝがみんな顫へて來て、ふと後十分と口でつぶやいて見た。預金も拂出しも、一人も待つてゐない、午後の日ざしが微粒子を粉のやうに浮流させて、自分の呼吸づかひで埃のなみが、下の方からくづれてゆくを見つめた。その時、表のドアが開いて突然わかい一人の男が這入つて來て、時計を見上げると、いきなり江梨子に、まだ時間はありますねと圓い聞きなれない聲で聞き糺した。ご預金でございますかと江梨子は、その男の息切れを顔に感じながら言つた。

男は一枚の小切手を取り出すと、江梨子の前に差し出した。江梨子は順位の札を出す必要がないので、すぐ次席の卓の上に小切手を廻した。わかい男は待合のクッションに腰を下ろしたが、女事務員の顔色が尋常でないのに氣附いて、煙草に火をつけながら何度も見直した。江梨子の頬のにくが顎のあたりで盡きようとしながら、そのふくらがりのひろさが、ふかさをたつぷりと男の方にひろげて見せてゐた。江梨子は顔を見られてゐるので、一そう瞳がちかちかしてうるこのやうなものが食附いて、ものが見にくくて困つた。いつもは聞えない時計の音がお醫者の待合室

に藥を待つてゐる時のやうに、俄かに聞えて來た。住所書きではこの男は東京から金澤に來たらしかつた。

三時五分前に再び銀行の前に自動車のドアの音がし、これも、わかい男だつた。這入るとすぐ時計を見上げ、宜かつた間に合つたといふ氣分のゆるみを見せて、小切手を江梨子の窓口から差し出したが、江梨子の顔色を見ると躓いた眼附で、餘程の事がらを耐へてゐるらしい様子に、なんとなく注意した。そしてこの男が、待合にある男と顔を合すと、二人とも、やあと言ひ合つた。そして偶然に此處で顔を合したことを殆ど豫期してゐたやうでもあり、また鳥渡まごつた顔色でもあつた。

「僕も土地がらが古いので警戒はしてゐたものの、あんなに總がかりで糶つて來るとは思はなかつた。盛んな土地ですね。」

先の男はさういひながら女事務員の方を見た。顔色はもどつてゐるらしい。

「あんな高値なんて何遍もお目に懸れませんね、あれはまるで金で決闘してゐるやうなものですよ。」

後から來た男は、靴の先で煙草を消した。

つまり何千圓から何十萬まで叩き伸すのだから適はない、それも刻んでイライラさせて置いて最後の價格に持つて行かうとする、此方が肚を据ゑてかかつても氣持がねぢれて來るのだ、乗るまいとしながら、つい乗つてしまふ、田舎辯のまじつたふしぎな叫び聲につくまいとしながら、

つい従いて行つて叩かれる、一さいを承知しながらもぐいぐい引き摺られるのだ、何とかの戦争で捕虜に穴を掘らせて置いて片つ端から銃殺するところがありますね、こんどの賣立は、結局あの手なんですよ、僕達は東京からやつて来て片つ端からふん奪^だくられて、二倍も高値の物をかついで歸京するやうなものです。藩の賣立なんていふものは、藩それ自體がくせものなんです、

……

「恐ろしく因習のある土地ですね。隙間もない歴史の垢で塗り立ててゐる土地がらすよ。その勤さと來たらどんな刃物でも切れはしない……」

先の男はまた隙の内で、女事務員の顔をぬすみ見た。一たい何の爲にあの女の人はあるにイライラしてゐるのだらう。顔がそれを持ちきれないでゐる、……

「どんないい物もあるかはり、その匂ひをかくまでには大へんな時間がかかりますね。」

先の男は窓口に眼をやると、江梨子の方でも眼で金が出た意味を知らせた。男は窓口にその長身でさつぱりした顔を寄せて行つた。

「宋耕一様でございますね。」

「宋耕一です。どうも遅くに。」

宋耕一は札束を查せずに、無難作に内ポケットにしまひこむと、ちよつと江梨子に頭を下げて見せた。そして後から來た何處か落ちつかない、ちやかちやかした男にいつた。

「何時にお立ちですか。」

「今夜立たうと思つてゐるんです。」

「ほう、僕もこれから荷物を引き取つて急行で立つんですが……」

「では汽車でまた。」

宋耕一はふいに下りて來た大きな鳶のやうな恰好で、ドアの外に出て行つた。

その時江梨子の左の耳が眞赤になつた。ほてつたものが耳からはじまり、顔の中までひと廻りしたやうであつた。それが所在ない眼でゐる後から來た男の眼にとまつた。

「氷見康様。」

氷見康はこれも多額の札束をあらためないで、江梨子に默禮をして去つた。どこかに、旅行者のしたしみは見せてゐたものの、平凡に表に出て行つた。

三時に五分を過ぎ、表の扉がしめられた。

江梨子の卓の抽斗にはけふの給料の袋しかはいつてゐない、悉く整理を済して置いた。彼女は何時ものやうに搬出用の帳簿と、金庫入りの物とを始末をし、支店長代理がそれをしらべた後、矢崎代理は君はけふどうかしてゐるんですかといったが、いいえ、何でもないんですと答へて、嘘をついた自分の人の惡さを感じた。あまり顔色がわるいものだからと矢崎代理はいひ、四時には他の行員も退行していつた。そのあひだに江梨子は毎朝するしごとをして、反古籠まで少年貴島にさう言つて棄てさせた。あらためて少年貴島にお茶のありかと、此間の土曜會の會費のこ

とを詳細書にして、月末に集めるやうにいひ、客用の取物その他の書類を一括して自分の抽斗に

いれて置いたことを入念に話した。少年貴島は江梨子のさういふせきこんでは落ちつかうとする顔色から、なにかを讀みとらうとしたが江梨子は洗面所にはいつて行き、貴島の質問を避けた。冷たい水で思ふさま顔を洗ひ、手を洗ひ、そして鏡に見入ると、あなたはわるい人ねと自分自身に呟いて見てはじめて、今朝からの顔色をほくしてみた。彼女はハンドバッグから化粧道具を取り出すと、最後にくちべにを刷いてみてから、自分の顔が自分にもどつて來ることを感じ、唇を押し出すやうにしてそれを見まもつた。小さいトランクは昨夜のうちに、むねのどうきまで一杯につめこんで、驛預けにしてあつた。

「それから貴島さん、これを上げるわ。」

江梨子は辭書と小説本とを四五冊自分の戸棚から出して、雑誌と一しよに貴島に與へた。貴島は憫れた顔つきからみんな解つてゐるやうに肯づいてみせた。

「あなたね、小説の勉強なぞしないで銀行のお仕事をなさいよ、こんな田舎にゐて文學なんて誰も見てくれませんからね。」

貴島はそれには答へずにいつた。

「宮内さんのスリッパどうするの。」

「捨ててゆくわ。」

「ぢや僕貰はう。」

「こんな朱いスリッパどうなさるおつもり。」

「とつて置く。」

「とつて置いたつて女物ぢやないの。とにかく上げるわ。をかしいけれど。」

「ありがたう。」

「それからわたくしのお茶碗もおあげするわ。」

「僕それもほしかつた。」

江梨子は貴島が自分を好いてゐることはとうに知つてゐたが、何時も反對の側にゐて、貴島には普通よりもつと無關心なふうに見せてゐた。この骨まで軟らかい少年の讀む本も含めて、どこか怖かつた。怖いことを頭でしらべ上げてゐる貴島には、何をするか判らないものがあつて、けふになると、柔^{やさ}しい事を言はないで彼から退いてゐたことが宜かつた。

「急行で行くんですか。」

貴島は僕、人に隠れて送るといつた。

「あなたはどうして今夜立つことを知つてらつしやるの。」

「悪るかつたけれど一昨日來てゐた島木靖子といふひとの葉書を見たんです。ご免なさい。」

「さうなの。それで何もしらずに靴棚まで掃除してくだすつたのね。」

時計は四時三十分に廻り、行内にさした春の西日も何時の間にか引いて行つた。あなたにも、お世話になつたわね。驛には來ないで頂戴。それから明日の朝は少し早めに出勤なさるのよ、かはりには此間支店長まで履歴書を出しておいた方に、うまく順番が行きさうなの。あなたもきつ

と好きになる方なのよ、江梨子はいふと小さいトランクを提げ、裏玄關からコンクリの四角な袋小路から出て行つた。貴島はその時には見送らずに行内の人氣のない椅子にゐた。このちんぴらも既に真正面に感情を打ちまけることの、惑はしさを避けることを知つてゐた。

大川の鐵橋を渡つてその土手べりを、江梨子は再度と來ることのない土地のしたしきで歩いた。日はまだ高いし土手の櫻は満開であつた。白けたその雲形の花樹を見ると、この土地でお別れにあひたい唯一人の下宿のわか子が、川上の實家に戻つてゐること、わか子が煙草のやにのやうな顔をしてゐる姑達に、二年のあひだ苛め抜かれてゐたことを思ひ出した。アパートではないが下宿の廊下を毎日冬の間も、水拭きでこき使はれその白い腕や顔を見ると、江梨子は妙な性的なむらむらしたものを感じた。息子は溫和しい一方で、そんな溫和しい性質といふものが、却つて虐待されてゐる自分の妻のことを、知らないふうで通すものだといふことを江梨子は知つた。折々、江梨子の部屋にくるわか子は何でも聞くことは、かくさないで細々こまこまと話してゐた。しまひに江梨子は少々わか子といふ女がぼんやり過ぎることや、いまだきこんな無性格な女があるのかしらと思つた。何でも夫婦間のことを聞かしてくれるわか子に、それが江梨子のたまごのやうな肉體に、たとへば肌みをすべつてゆくべつの肌までを、江梨子はお腹の上にぺたぺた感じながら聞いてゐた。だから、わか子が來ると何かを訊き出さうとして、そんなことで妙な息づかひまで異つてくることを、毎度のことでどうにも抑へることが出來ない、わか子もそんな話をするのが嬉しいらしく、何時までも喋べくつてゐるうち江梨子はしまひに自分自身が腹立たしくなり、

自分が他人の祕事を訊き出さうとする考へから、早く脱け出したために黙まりこんでしまふことがあつた。わか子が一日ぢゆうきき使はれてゐるのも、みな夜の祕事のために性來の薄ぼんやりも手傳つて、年寄達の虐待を我慢してゐるらしく思はれた。肉體の白いといふことが、わか子を見ると頭につんと來ていやらしかつた。わか子が或晩男つてどうしてあんなことをするのでせうと不思議さうに言つた。こんなばかばかしい言ひ方もないし、こんなふうに考へれば全くあんな惻れ返るほど男が勝手に自分だけで済してゐることがらは、わか子には肝腎な急所がわからなただけに、ああ言つてふしぎがるのも、無理もなかつた。併しこのことがらは江梨子にも判らないものだつたが、概論風にいへばわか子といふ女は教へられながら、何時までも判らないのだと考へてみるのだが、江梨子にもわからないことは何處までも判らなかつた。江梨子はこれを處女といふのかしらと今まで氣にもしなかつたその言葉を、重く見るやうになつた。へんな融通の利かない言葉としか思へなかつた。

わか子は藤棚のある百姓家風な茶の間で、縫ひ物をしてゐたが、長いからだも顔も肉づいて少しも暢びりしたところが失せてゐなかつた。江梨子は東京生れは東京がよいといひ、誰にもお別れはしないがあなたにだけは、ちよつとでもよいから、お逢ひしたかつたと率直に言つた。實際、わか子が二年間に話してくれたことは、江梨子の肉體にその「話」がぐるぐる廻つて來て、夜なぞわか子がだらしなく、或る意味では莫迦のやうな顔附で話したことが刺戟して來て、そこに或る形と動きとを取り入れると、ひとりでに下腹のうへに手が行き、腹のふくらがりを撫でさ